

2がっのくもの子の会だより

<H.31.1.21>

今年の冬は「暖冬」と予報でいわれていたが、ほんとに暖冬
となっていますね。日中、日が照ると、ほかほかして、自分(ぼん)こ
が気持ちのいい日もありましたね。うちの中よりも(うちは
特に)、外のほうが暖かく感じの日もありましたね。2月も
このような感じで、春を迎えるのでしょうか... インフルエンザも
はやっていますので、いろいろですが、何とかのりきれたようです。
<子育てはこれでいいの?> (説・たむくみ行 抄)



～ 乳幼児期とは「ヒトから人間になる」時代 ～

人間は他の動物に比べて、はるかに未熟な状態で
生まれてくると言われています。生まれたばかりの人間の子どもは、
人間以外の動物に育てられると人間以外の生き物に似
せて成長することができず(まだ)未完成で、柔軟な存在です。
つまり、動物であるヒトの子どもが人間の子どもになるうえで、
乳幼児期は非常に重要で、独自の時期だといえます。

私はこれを植物の生長のイメージを借りて、説明しています。
植物というのは、根から育ちが始まり、根が自力で水分や
養分を吸い上げることでできるようになるまで、発芽はしない。
しかし、目に見えない土の中で根は着実に生長していて、
しばらくすると芽を出し、葉をつけ、やがて花や実を咲かせていく。
「命あるすべてのものには育つ順番がある」ということなのです。

乳幼児期とは、ちょうどこの目に見えない「根」を地中に
伸ばす時期だと思えます。



～ 五感の力と身体を育てることが大切 ～

乳幼児期に「根」を伸ばすとは、視覚、聴覚、触覚、
嗅覚、味覚の五感(以下、感覚器官の意味も含めて用います)
を発達させ、感性を豊かにすることです。五感とは、外の
世界を認識し、それを受容する器官です。五感から受け
入れた感覚を、快と感じるか不快と感じるか、安全と感じるか
不安と感じるか、そこに感性の力があります。また多くの
人びと情報や感情を交流するも、五感の力です。
五感の働きの、人間が生きていくうえで非常に重要
なものなのです。

風のもよぎや、雨や土など、いろいろなものの違いを
肌で感じ取る。人工甘味料が含まれたようなお菓子は
なく、自然のまじりの食材を味わう。ゆけに自然とわか
わる体験が子どもたちの感性を研ぎ澄ませ、豊かに
していきます。

最近の子どもたちは、腰を曲げても手の指先が足の
指先まで届かないくらい、背筋力が弱くなるなど、
身体の変化が見受けられます。運動量が減ってきている
ことが原因ですが、単に筋力の問題というだけでは
片づけられません。心の動きの固さや閉鎖性の現れ
であり、身体を動かす脳の発達と未成熟さの現れ
でもあるのです。

そこで乳幼児に育てることが大切なもう一つは、

身体の育ちを保障する事です。足の指先から手の指先まで、そのすべてを自分のイメージどおりに動かせる身体の育ちをつくり上げた子どもたちは、ものごと集中して取り組み、自分がめざす課題をやりあげることができるようになります。身体につながった心の強さや心の明るさが育っていくからです。そして、その体験が、自分の意志と力を信じる心をも育んでいくのです。



～ 人間の発達には順番がある ～

フランスの心理学者ヴィオーは、人間の発達を「実用的知能」「論理的知能」という概念で説明しています。

実際に身体を動かして、感覚器官をつい動かして、五感を通って焼きつけられるものが「実用的知能」。

人から教わるものではなくて、自らの体験を通して習得していくのです。

それに対して、「論理的知能」とは、文章や記号などを通して抽象的な思考ができることをいいます。

実用的知能は、そのあとに発達する論理的知能を支える土台として考えられています。(図1)



早期教育ゲームで、「頭の上の子はよい」と幼いころから文章の読み書きや英語を教え込む傾向がありますが、これは発達の順番を無視しています。

実用的知能をないうがしろにして、論理的知能の一部にすぎない記憶力や記号操作力が追求されている。

土台(根)がしっかりしていないうのに、上の部分だけをどんどん大きくすれば、ついには不安定な発達になってしまうのです。



<2月の子ども云々 No.2>

乳幼児期から学童の時代は、実際に身体を動かして五感を通ってさまざまな体験をする。感覚器官そのもので外の世界を受け止め、踊ったり、歌ったり、叫んだり、走り回って表現することが、大事な時代なのです。

～ 全身で夢中で遊ぶことが知的発達を促す ～

(前略)

子どもの身体と心の発達を研究している正木健雄先生(身体教育学教授)は、人間の脳の活動には興奮させる力と抑止する(ブレーキをかける)力の2つがあり、そのバランスによって人間は自分の活動をコントロールしているといいます。大脳を正常に発達させるには、乳幼児から10歳くらいまでは興奮する力を育てることが大事だと言っています。

一つのことに熱中して、一瞬それは食いついて離れずくらいに興奮を継続する力を、子ども達に育てることが大切だというのが、友だちと夢中になってかばんほぎをしたり、魚捕りをやる。そういう全身を使って、人や自然とかわり、熱中して遊ぶ経験が、子どもの脳を発達させていくわけなのです。

さらに重要なのは、脳抑止する力は、興奮する力が発達するにつれて強まってくるという指摘です。10歳くらいまでに、興奮する力を遊びなどの中で発達させてきた子どもは、そのからの自分の力で自分の活動をコントロールするための抑止力を発達させるようになるのです。それに対して、夢中にならないうちに興奮の乏しい子は、抑止の力が弱く、いざ興奮すると抑えが利かない。ちよとしたことでキレてしまったり、泣き止まないうちに友だちに殴りかかってしまう。

脳の持つ抑止力を引き出すためにも、熱中して遊ぶ体験は大切なことです。 <子育てはこれだ!! のか 志木克行氏>